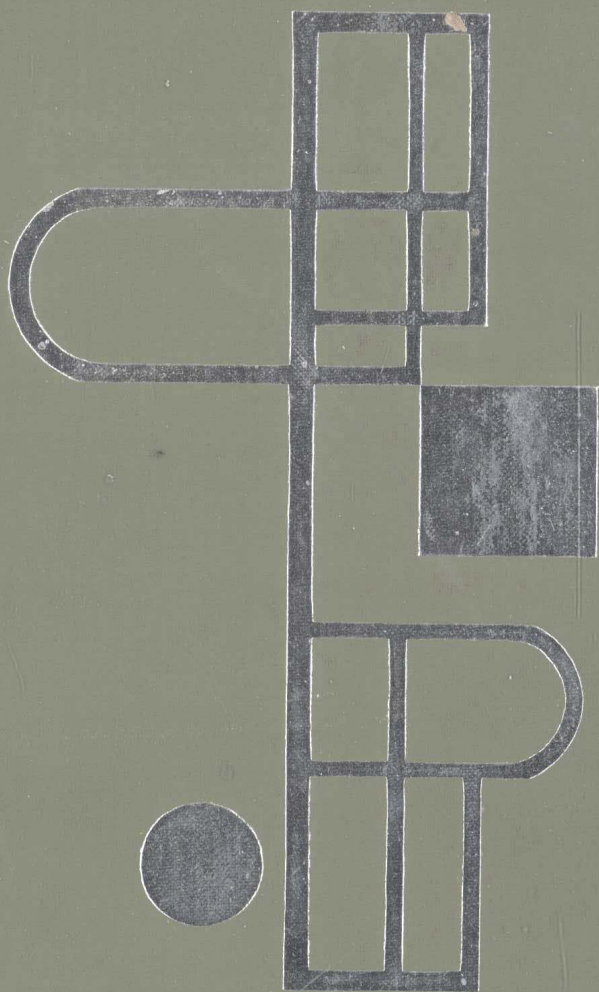
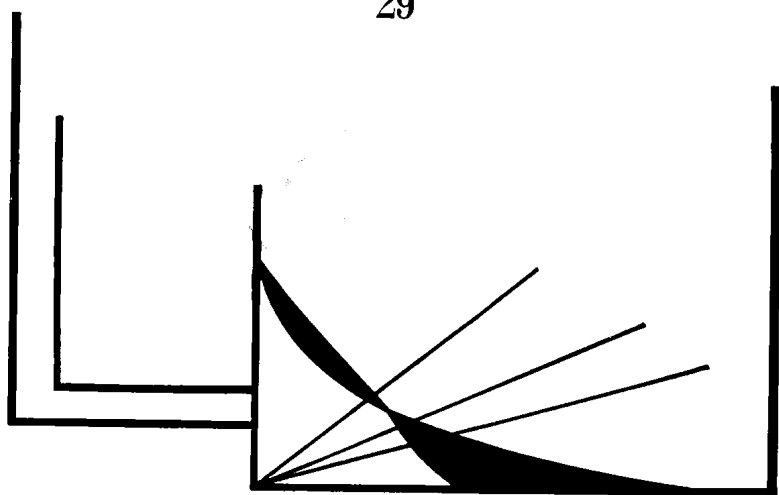




野間宏 集

新選 現代日本文學全集

29



筑摩書房版

野間宏集

昭和三十五年十月二十五日 発行

著者 野間宏ひろし

発行者 古田晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京五局 七六五一（代表）
振替 東京 一六五七六八

整版株式会社
印刷株式会社
製本牧製本印刷株式会社

野間 宏 集 目 次

青年の環	五
暗い絵	二四
第三十六号	二七
残 像	二八
哀れな歓楽	三〇
崩解感覚	三一
悲しい錘	三九
夜の脱柵	四六
車の夜	五二
コレヒドールへ	五九

ジイドのラフカディオ	三六
「マダム・ボヴァリー」論	三七
象徴詩	四五
虎の斑	四九
野間宏小論	四三
壇谷雄高	四三
解説	四九
篠田一士	四九

装幀 恩地孝四郎
 恩地邦郎

野
間

宏

集

青年の環

第一章

色彩

一

場内は明るく粧まわれた人々の顔で満されていた。黒塗りの少し出張つた円形のオーケストラボックスの後に、肩から腰にかけて布をまとい、円く口を開いた壺を細い両手にささげたアッシリア人の群像を薄茶の横糸で浮き出させた薄緑の緞帳ドレープが柔かくたれてゐる。この緞帳のかくしている舞台を中心に奥行の長い扇形に後方の開いた場内は、人々の黄や赤や薄紫や白の色とりどりの着物の模様と、幾らか期待の現れた様々の男女の顔を並べて、こうした場所特有の低い話し声や笑声や、四囲の壁につき当つて戻つてくるので一層舞い上るように思える華やかなさ

わめきで満ちている。中央部の高い頂から静かな円い勾配が周囲へ降りている柔かい卵色の天井が、天井と周囲の壁とが交る隅々から煙るような明りを辺りにもらし匂はわせている。そのほの明るい天井の下で観客のなかに時に動く白い扇子が場内の光りを受けてひらひらと輝き女達の厚い化粧の顔の上に揺れ動く小さな影を落して、ひらめくような斑点となつて翻るとき、場内は一瞬美しい色紙を空から舞いちらせ、それが観客席の辺りで急にびたりと止つたというような錯覚を起させる。

周囲の開け放たれたドアがボタン、ボタンと閉され、幕間を屋上へ涼みに出たり、便所へ立つたり、或いは喫茶室のテーブルをかこんで、むしろそれが目的で社交に費していた人々が各自の席に戻つて来た。それらの足音で開幕を待つ人々の気持は急に乱され、突然声高になつた話声がひとしきり場内の端から端へ送られるように拡がつて行くと、やがて又はたと止み観客達の開幕のベルを待つ心組みが場内に満ち渡り高まつて来る。と、その幾分期待に充ちた人々の気持を揺るすように、じつと沈んだ地をはうようなベルの音が、舞台の右下の辺りから聞えてきた。そして場内の空気がもう一度ざわと一揺ぎすると、この大広間一杯に満ちていた柔かい照明の光りは、四囲の広い明るい壁の地に吸い込まれるようにうすれて行つて、次第に真上の天井の色をばかし、人々の生きた顔や肌の形をかすませ、やがてそれらの形を色のうすれ行

く影ばかりとし、場内は人工的につくられた夕暮のように全く暗くなつて行つた。そして場内に残つている光りと言つては、舞台の左前に置かれた演題告知の硝子箱ガラス箱から輝き出る淡いガス燈のような明りと、舞台の右横の壁にはめ込まれた円い夜光時計の文字盤と八時四十五分を差している二本の針の、螢火を灯したような緑色の明りだけになつてしまつた。

後の中央のドアの片隅が小さく開き矢花正行が、半ば開いた戸の隙間から、音をたてぬようにと気を配りながらはいつて来た。外の廊下の明るみから急に暗い場内にはいつて来て視力を奪われ、彼はしばらく、そのままだアの処につつ立つていたが、もし此の時一条の明りが闇の中にさして彼の顔を浮び上らせたとすれば、人は彼の長形の顔の上に鮮かに印された苦しげな冷笑を認めることが出来たであらう。そしてさらにその光が、彼の心の底まで突入つて照し出すことが出来たとすれば、彼がここへ来る道、かなり長い間、今夜の舞踊会に出演する筈の一人の踊り手に対する彼の慾望に烈しく抵抗しながらも、遂に彼の意志がこの慾望の強さに破れ去つた、はじめな闘いの名残り、いまでも尚彼の脳壁にびつたり附いている一人の女の肢体や、彼の嗅覚を揺り動かそうとする或る特別な女の器官の匂いや、彼女に対する憎しみや恐れや怒りなどの交りあつた心のけいれんを、そこにはつきり描き出したことであらう。

矢花正行は暗い場内に眼をならすため、ゆる

やかな丘のように前方へ降つてゐる場内の、ずっと前方の自分の座席に当る筈の招待席の辺りに眼をやつていたが、次第に辺りにはの明りがさすように人々の頭や後姿や椅子の列が形をあらわし、それらの向う、舞台の左側の演題告知箱の中に「白昼 大道陽子」という演題が輝いているのを見たとき、「とうとう来てしまつた」という低いつぶやきが彼の口の上つて来た。そしてそれと共に彼は、恐れている宗教上の戒律や禁制を破つてしまつたとき人々がよく感じるようなあの一種特別な落着きを感じたのである。彼は自分の心に抗つてわざとゆつくりと椅子席の間を降つて行き、空いている自分の席に人々に許しを乞いながら腰を下し、むしろ落着き返つたような氣持で眼を前方の舞台にそそいだ。「じゃーん」という急激な銅鑼の一撃が鳴つて、何処からともなく差し込む照明燈の白い光が、観客の頭上を斜に切り、音もなく幕が上げられる。と舞台の奥には降つて来る光の中に濃いきとおるような青い海が霞むように拡がつており、右手の白日の光に輝く堆い砂丘の遙か向うに続く砂浜が、焼けるような熱を湛えて舞台の手前迄のびている。そしてその砂丘のゆるやかな傾斜が水打際に落ち込む辺り、熱い太陽の光を存分にあびて一人の女の媚めかしく日に焦げた体が純白の布につつまれ寝転んでいる。左足を砂上にのばし右足を左足ひざにそつてつま立て、この踊り手は純白の小さいダンス靴をびつたりつけた爪先を伸し切つてゐる。たてた脚の

下部のところで短いスカートの裾が乱れ開く。すると遠くの海と同色の青いパンツにつつまれた柔かい腰部がそこに咲き出る。肉の匂い、慾望のただよい。この女の体、というよりも腿の辺りで急に肉慾的に太くなつてゐる裸の右足は冷い光りを溢れる程にも受けて、滑かな、油を輝かせてゐるような皮膚をきらめかせる。巧に力を抜いて砂の上に無造作に投げ出されてゐる両腕。この力を軽やかに保持してゐる筋肉の緩やかな有様。

強い浪の打ち寄せる響が、ピアノの中から聞えて来た。そしていま正に太陽の讃歌が一つの女の肉体を借りて舞台の上に表示されようとする。……と急にピアノの音が高い鋭い痛むような響をつたえたと思うと、寝転んで立てられていた女の右足の爪先がさつと体に直角に上げられ、つづいてのばされてゐる左足をこえて砂の上につま立てられる。すると反動のある上体が軽い飛躍を抱いてはね上り、今度はただ波の音をくりかへして行く音楽にのつて、繰り出すような両手が、五本の指をひろげて大きな掌を海の方に向けたまま、遠くの青い海の無限の拡がりの方に向つてさし出される。青い海の無限に向つて幾回となく呼びかける掌、そして女は舞台の左奥に進み寄つて行く。人間の情熱の極度の昂まりがしばしばそこで喘いでゐるように、ピアノの音はとおい途切れ途切れの旋回を響かせ、青い海の無限の手前でとまどつてゐるように、女のさし出された二本の手が伸びようとして伸

びきらぬ所作をつづけてゐる。と、太い地を匍うような大地の轟きにも似た響の中を、女の体が如何にしても到達することの出来ない海の無限に冷酷につき放されて、同じ振付をくりかえしながら後退して来て、燃えている砂丘——大地にしつかと抱えられる。いま再び女は大地のものだ。砂の上に体を投げ、左足にささえられた高くあげた右足。そして、この「太陽の光りを存分に受容する生命」の美しいポーズが、帯状にさし込む照明の明りの中に、くつきり浮んでいる。

矢花正行に取つては、これらの大道陽子の姿態は、彼の肉体に対する一つの烈しい不意打であつたと言えた。幕があげられ、照明燈の光りが造り出す明るい海の底のような、一種現実界をかけるなれた舞踊のアトモスフェアが舞台の上に形成されて行つたとき、正行は固い椅子に背を押したまま、向うに展けた舞台の上の一人の女の半裸の姿にじつと眼をそそいでいたが、彼は次第に自分の眼がその寝そべつてゐる女の裸身にすいよせられるのを感じた。併しそれはまだ冷やかな光を浴びて横わつてゐる一人の踊り手の裸身にすぎなかつた。と突然彼は自分の視界の中に異様な性的の牽引力が動くのを感じた。すると眼の前の寝転んでいる踊り手のつくり上げてゐる華かな芸術的形像が見る見る乱れて、この踊り手の姿の下から、大道陽子の生身の姿が現れて来た。……その踊り手の足、踊り手ではなくて、正に陽子のその足を彼は

知っている。それは彼のみが知る、大道陽子の現身である。ああ、この足、この体。このあつい熱。砂浜に寝転ぶ陽子の熱い体が彼の両の眼をあつく焼く。彼はじつと大きく眼を開いて舞台の上の彼女の姿を追うていた。彼の眼の筋肉はふるえ彼の眼は大きく開いた上にさらに開いた。彼の体はこまかくおののき、毛孔に血がみち、彼は情慾が体内に充ち渡つて行く熱い苦しい充実感が、体のすみずみ迄拡がつて行くのを感じた。そして遂に彼は、自分の体内の慾望の昂まり行く烈しい響きが、この薄暗い場内一杯に伝わり拡がるような戦きを感じた。以前彼女のこの肉が、彼の肉の上に印した消え難い快樂の跡形が、灰色の歯を並べて降るどしや降り雨の中を引き裂いて落ちる落雷の赤い火箭が暗い宇宙を振動させるように、彼の肉体のもつとも深い暗闇の中で、生き返り、新に爆裂するのを彼は感じた。併し彼はすぐに自分の内に強い意志力を呼び集めて自分自身を制禦した。そして自分の体内を駆け去る情慾の烈しい戦きに抗いながら、舞台の上の踊り手の展げる舞踊の姿を追うて行つた。

情慾に対抗する精神の強力な作業が彼の心の内に起つて来た。彼は自分の冷厳な精神の眼が自分の情慾の蠢めきを冷やかに見つめているのを感じていた。そしてその冷い眼が、同時に舞台の上の陽子の踊りの形や姿や色や、そしてその足と手と首と腰の使いわけける舞踊のテクニクを、何一つ見逃すまいとして眺めているのを

感じていた。そしてその眼は、もしその踊りの手法に少しの誤謬があらわれようと、容赦なくそれを摘発し、取りおさえ、彼女の前につきつけようと心組んでいるようであつた。

舞台の上の女の体は、軽やかな輪舞に移つてゐる。大地に埋れるように寝転んでいた身体が立上つて来ると、舞台の上に撒かれていた黄金の小さい紙片を、砂粒をつけるように太り気味の手首や円い肩や背や太腿や長く後に垂した断髪に髪に附けて、それが照明の光りに当つてきらきら輝き、彼女が軽やかに身体を旋回させて舞台の上を廻つて行く毎に、身体から離れ落ちてきらめきながら消えて行く。女はいまだ大地の自由になつてゐる。旋回しながら軽やかに両腕で交互に空を切るようにして舞い、優美なスライドと敏速なカットを交えた進行が再び旋回に戻つて行く。そして女の体は再び大地の上に投げ出され、ここで大地の営みの表現に移つて行く。輝く太陽の下の大地の喜びというか、喜びというには少し無表情すぎる、幾分単調な、大地の太古より変ることのない永遠の営みの形姿が、砂の上をゆるやかに転り行く女の体の上に表われ始めた。

矢花正行は依然として舞台の上の女の肉体を眼で追ひながら、嘗ての恋愛の対象者の体を、しかも裸に近い体を、こうして何千と取りかこむ観客の眼の中の二個の眼として眺めている自分の不思議な位置のことを、ちらと頭の端で考へていた。新しい美しい舞踊の形をつくり、つ

くられたと思うと直ちに消え去り、続いて次の形に移つて行く踊りの形象を、強力な精神の支えを呼びながら追跡しつづ彼は自分の頭脳の奥深くちらちらと甦り展開して来る彼の過去、彼の不幸な過去、陽子の肉体に関する彼の不幸な過去が、非常な速度でかすめ通るのを、見守つていた。「この体、これが俺の何よりも求めているものなのだ」彼は彼の体が彼に向つてこう叫ぶのを聞いた。「如何に、俺の心が、この肉体を無視し、軽蔑し、既にこの肉体から絶縁したと宣言しようとも、それは偽りであり、誤魔化しにすぎないのだ」彼の体は、この前の女の体を知つてゐる。この砂の上をゆるやかに転がつて行く女の体を、はつきりと、彼の参加してゐる一つの過去の場面の内にある姿として知つてゐる。彼は彼の熱く燃えている身体の下をくぐるようにして、彼の右手の指先から伝ひ上つて来る一つのなめらかな肉の感覚を、ちらと再び頭の中で振り返る自分を感じた。彼は過去の快樂がいま再び自分の身内を慄わせるのを憎々しげにながめた。自分の意志の自由にならない自分の肉体の感覚と肉体の神経の存在が彼を苦しめる。しかし次の瞬間、彼は、この女の肉体が既にいまは全く彼の手から離れて彼からとおく去つてしまつてゐることをはつきり思い起した。確にこの女の肉体は、明かに彼の肉体に対して快樂のはげしい反応を返してよこしたことがある。それはほんの一時のことであつたにしろ、この肉体はたしかな手答えを、彼の肉体に

示したことがあるのである。併しいま舞台の上で両足と両手を以て上向けの体を支え白い太陽の光を浴びて大地の永遠に繰り返される営みを表現しようとしているこの女の肉体は、もはや現在の彼には如何に努力しようとも近づくことの許されない存在である。それは既にずつと以前彼の掌の中からすべり去つてしまつたのである。彼は嘗て彼を近づけたこの肉体がついには憎しみにもえながら彼の肉体をむごくしりぞけたことを思い起した。もはやこの体は彼のものではない、それは全く彼の意志から独立した意志をもっている一の別個の存在にすぎない。この肉体の中には、いまでも彼に対する憎しみが封じこめられているに違ないのである。そして彼は、彼女が彼に寄越した最後の手紙の言葉が、まるで昨日来た手紙の言葉でもあるかのように、生々と甦り、舞台の上からおどり上るようにして彼の頭に浮んで来るのを感じた。『どうおつしやろうと、あたし、もう、あなたを愛することとは出来ないと思います。あたし、幾度も、あなたを愛しようと思つてはみました。自分を愛情の裏切者などにはしたくないので、苦しみましました。でも、自分の感情をどうすることもできないということば認めて頂き度いと思います。あなたにはほんとうにお気の毒だとは思いますが……でもそれは致し方ないことと思います』併し、一年間もほとんど手紙のやりとりもせず、全く関係を絶つていた彼女が、どうして自分を今日の舞踏会に招待したりしたのであるか……

或いは彼女は再び彼を元の関係に引き戻そうと言うのだろうか。そんなことは有り得ることではない。彼の前に彼女の肉体をつきつけ、彼がいまもなお彼女の肉体におびき寄せられることを確めることによつて、勝利の快感に酔おうと言ふのだろうか。

矢花正行は自分の脳裏を過ぎる、意識の急速な展開をおしとどめた。そして再び舞台にそそいでいる視力に力を加えた。舞台の上の女は、静に腰をもたげ、頭を逆様にそらせて両手と両足先で上向きの体を支えた。そしてゆるやかにその身を前後に揺つてゐる。と女の身体の全重量が上半身に集まつてきて、女は自分の両手下敷にするような恰好のまま砂の上に身体を投出して行く。太陽の光りに酔う大地の陶醉の表現が形づくられて行くのである。女は下向きに倒して力の抜けて長く伸びた体をかすかにちぢめる。とやがてだらりと前の砂の上にたれた頭が廻り、断髪の色がかがさつてゐる顔を徐徐に左に向け、眼をふさぎ、恍惚の状態の表情をつけたその顔が、観客席の方を向いたまま、じつと動かなくなる。正行は、膝の前で組んでいる両手の掌に汗と脂がにじみ出ているのを感じた。そして、その女の顔をじつと見つめた。紺青の海の揺がりを背景に、打ちつづく砂浜に体をうつぶせにして埋め、砂の間から顔を出して、あるか無しかの微笑を、閉じた堆い臉の辺りに浮べて、満ち足りた大地の喜びの表情を観客席に向つてさし出そうとしている女の姿。

海から吹きつける熱をふくんだ風が、後の髪の毛を越えて、この顔を光に濡れているように輝かす。太く長く先を急に細く細く細めて引いている眉、その下で閉ざされている二つの広い眼。しつかりした固い肉附をもつて高まり、尖の形が僅かにくずれて開き気味になつてゐる鼻、濃い白粉と紅を流した頬がゆるやかな傾斜をつつて小さい顎に走つてゐる。

正行が既に一年以上も見る事のなかつたこの恋人の顔は、踊りのメーカーキャブを施されて、彼には、全く別人の顔のように見える。この顔は、以前、彼の顔の真近くで、小さく慄え、おののき、その薄褐色の睫毛の細く外側に開き出した臉の端のほの赤い肉を、彼の眼に見とけさせたあの顔ではない。この顔の形は彼女のその顔の形と同じ形でありながら、何か薄い透明な膜でつくられた仮面をかぶつて、その下にある彼女の真実の顔を蔽いかくしてしまつてゐるかのように見える。この顔は又、以前彼から僅か二、三步の距離のところにあつて、憎しみをつつみかくしている冷やかな見下げするような眼差しをもつて彼の心をしりぞけ、彼の燃えたつ心に冷水を浴せかけたときの彼女の顔でもない。あの彼女の日常の顔ではない。嘗ては彼が愛し、又彼を愛し、そして今では彼が憎み又彼を憎んでいる大道陽子の所有している顔ではない。この顔は彼に対する特別な何等の関係をもちてはいない。これはただこの場内の何千という観衆のための顔であり、踊りのための顔であり舞台

の上の顔である。正行はその彼女の顔に眼を向け乍ら、この劇場内のこの招待席に腰かけている彼の存在を、ただ一人の観客として取扱うその顔に、何かもどかしい苦しみを感じていた。幅のある銅鑼の一撃が鳴り、高い青空から日の光が降つて来た。と、開幕の場面と同じく強い波の打ち寄せる響がピアノの中から聞えて来た。そして踊り手の体が急に砂の上で回転して上向きになると、右足をつま立て横たえた左手が手の甲をそらせて羞恥の表情をつけ、太陽の光りを存分に受容するポーズが完了し、踊りはこの舞踊のライトモチーフである、青い海の無限に向つて肉体を繰りかえし繰りかえし出ししながら、遂にそこに到達することが出来ず、衰れにもつき返されてかえつてくる肉体の喘ぎの表現にもどつて来た。体内の情熱の泡立つ上昇とその情熱が無限の向う迄拡がるうとして喘ぎつづける姿が女の繰り出されて行く両手によつて形造られる。女は限りなく拡がる海の水平線に幾回となく呼びかけ呼びかけ、舞台の左奥に進み寄つて行くと、遂に青い海は女の心を誘いながら冷酷につきはなし、女は砂丘の上に漸く後退して来て大地の上につかと思えらる。そして女は再び大地の上に帰つて来て生氣を取りかえす。女には大地のほか生命を生かす場所はないのである。右足をつま立て左手の先を少しく羞恥のためにふるわせて太陽の光りをむきばり受ける美しいポーズが照明の中に浮んで来る。舞台は一瞬閉幕の前の深い沈黙にとざされ

静かに規則正しく、打返す波の音、高い天の降らすきらめき。
すると幕が降りた。と場内に溢れるような拍手が起つて来た。舞台の奥の青い海が徐々に幕の後に隠れて行く、砂丘のゆるやかな傾斜に横わつて上に上げている女の右の足が視界から消える、さんさんと降る太陽の光が観客の眼から遮られる。そして遂に長い房をつけた広い緞帳が「白昼」の明るい舞台を閉してしまつた。……再び拍手の大きな浪が観客席に鳴り渡つて来た。幕が既に降りていまだ舞台上ににいるに違いない陽子に向けられた人々の拍手に、何故か本能的に抵抗しながら、正行は膝の上の両手を固く組み合せ後の椅子に背をきつくおしつけ、靴の底に床のコンクリートの固さを感じて、じつと坐つていた。『俺は拍手しないぞ、俺には拍手は出来ないぞ』と彼はそのまま体を固くした姿勢でちらと考へた。幕が降りて一瞬暗くなつた彼の眼界の中には眼球の奥の網膜に焼きつてられた陽子の閉幕前のポーズが光りを放つもののように残つてゐる。彼は急に両眼に力を入れて固くとざした。そして眼の中の、陽子の映像をふるい落した。『しかし俺がこの踊りに拍手を送らないというのは、何も彼女に対する憎しみによるのだなどというのではない、ただ俺には、この踊りが踊りとしてほんとうにいいものかどうか疑しいからにすぎない』眼を開いて彼は思つた。併し彼は彼の脳裏をかすめ通るこうした言葉の後に、既に自分自身の心を烈しく

痛ませるものがあるのに気付いてゐた。観客席の後や左右両側のドアの開け放たれる重い物音が拍手の静まると共に聞えて来た。そして矢花正行の血の昇つた頭の中で拡がる拍手の音がうすれて行つた。彼の頭の深い奥のところでは幾千という白い紙片をちらしつづけてゐるやうに響いてゐる拍手の音をくぐるやうにして一人の女の顔が通りすぎる。一人の晴やかな表情をした額の大きい頬骨の少しつき出た女の顔、その顔がいくらか暗い哀しみの影を顔の上にちらつかせながら、正行の意識の中をくぐりぬける。その顔が彼の心を痛ませる。

高い天井の周囲の壁がほんのりした光を吐き始め、朝の光に似てそれよりもさらに暗く柔かい光りが幾重にも四囲の高い壁の上で交叉し、明りが漸次上の方から場内に降りて来ると、やがて辺りは全く幕間の明るみを取りもどし人々の背や肩や髪や椅子の形が、はつきりとそれぞれの位置をしめ始めた。そして全く明るくなつた明るみの中で、矢花正行は自分の精神が何か眼に見えない手で縛りつけられてゐるやうな、奇妙な状態に陥つてゐるのを感じた。彼は自分の体内を焼くやうにして通り抜けて行つた陽子の肉体の作用の跡形が、いまなお彼の体の真中をはしからはしまで太く真直に貫くやうに残つてゐるのを感じた。

人々のざわめきが起つてきた。椅子座席をはね上げる響が方々でし始めた。場内の空気はようやくくむつとして来たし、ワイシャツが汗にぬ

れて肌に附着している不快な感じが彼を把えていたが、彼はしばらく動きもならず、椅子のもたれに身をよせたまま、じつと体をしずめていた。

二

少し長い休憩時間であつた。人々が固い木張りの廊下を行つたり来たりしていた。人々の姿は廊下の天井のところでどこにつけられた小さいシャンデリヤ風の電燈の下に來ると、急に生とその輪郭をあらわし、再びほのぐらい明りの中に煙るように消えて行つた。そうした人々の中に交つて厚化粧と華やかな服装をつけ、幾らか人工的につくられた微笑を浮べた女達が何かばつと明るく匂う空気を撒きちらしながら通りすぎて行つた。矢花正行はすでに二回往復したこの長い廊下を、人々の後について再び当もなく会場の入口の方へ引き返して行つた。彼の眼は、時々彼の前に現れる一見して今日の舞踊研究会の關係者と判定出来る、人々の往來の中をくぐるようにして舞台裏の方に通り抜けて行く長いドレスを附けた女達に向けられていた。もしや陽子がそれらの女達の中から突然抜け出て來て彼の前にびたりと立ち止まるのではないかと思われた。彼はそれを半ば期待し半ば恐れた。もしほんとうに彼の前に彼女が突如として現われたとすれば、彼は如何にして彼女に抵抗すればいいのか。彼女の着けている衣類の下に柔かく動き揺れる彼女の体は、きつと彼の体を震え

おののかせるにちがいない。彼女の体が彼の上に、現在も以前と変りなく烈しい作用を及ぼすということは、既に先刻の彼女の舞踊によつて確められたことである。彼は少し上り坂になつてゐる廊下を滑らぬように用心しながら一歩一歩力を入れて歩いて行つた。再び廊下の終る端の辺りに來た。突き当りの右側にはこの会館の事務所があり、その受付に行けば陽子に連絡ができることになつてゐた。彼は再び彼女の手紙を頭に浮べた。『その受付にお伝え下さればすぐあたしのところに通じて預けるようにしておきます。是非共お伝えしなければならぬこともございますし、お忙しいことは存じますが、お出で願えばほんとうにうれしゅうございます。』すると彼の心は次第に冷えてきた。相手の都合を慮つてゐることを示そうとする儀礼的な言葉を手紙の随所に用いてゐる彼女の心が又もや彼の心に冷く触れてくる。確にその手紙の言葉は、以前は互に恋人同志であり既に現在は（互の了解の下にその關係を絶つたのであるとはいへ）そうした特別の關係から脱してしまつてゐる二人の間柄をはつきり意識によせて書かれた言葉に相違ないのである。併し若し逆に彼が彼女に手紙を出したとしても、彼もきつと亦こうした言葉使いを選んだに違いない。以前二人が恋人同志であつたときやりとりしたような手紙の中のある柔かい言葉使いを意識的にさけながら、全くこれと同じような手紙を書くに違いない。「お忙しいことは存じますが」な

どと彼もやはり書くに違いない。正行は現在の自分達二人の間に存在する動かし難い距離をはつきり心に思い浮べた。そして事務所の前を通り越し、左に曲り、明るい電燈の下に煙草の煙が白く揺れるように浮んでゐる会場の正面入口の方へ歩いて行つた。

休憩所は混雑してゐた。濛々と煙草の煙が立ちこめ人いきれでむつとしてゐた。人々の思い思いに喋りちらすざわめきの中からときどきはぜるような笑聲が起り、又もとのざわめきに返つて行つた。ところどころに扇子が舞い女達の服装が光つて煙つてゐた。人々はあちらに一団こちらに一団という風に塊をつくつて立つてゐた。或いは真中のソファに腰かけた連の人達をとりかこんで先刻会場で皆の前に展げられた舞踊についてその全体の意図やその一つ一つのポーズや又出演者の出来不出来やそのうちの一人の踊り手の急激の進境やそうしたことについて話し合つてゐた。入口近くのコーヒー販売店の前にはこうした催物によく見られる、舞踊が目的というよりもただ人の中に出て人々の注視を浴びたいという風な装いを凝した令嬢風の団が、自分達の出身学校の先輩に當る今日の著名な出演者の一人を囲み、幾分含み笑いを交えた笑聲をあげてゐた。遅れてこの休憩場所にやつてきた人々は既に真中のソファでも、又隅々に置かれた長椅子にも空席がないのを見てとると、西側の大きな背の高いガラスのドアを押して涼

しい風に身をなぶらせながら、遙か下の方に拡がりきらめく夜の街の灯を見下すことの出来るバルコンの方に出て行つた。

矢花正行は部屋の西隅の長椅子の端に空席を見つけると煙草に火をつけ、ぼんやりした眼差しを周囲のものに向けていた。短く刈り取つた故に一層広く見える広い額に煙つた電燈の明りが鈍く映えている。細く落ちた頬には暗鬱な影があり、何か不安を抱いているような眼が、前方に視線を放ちながら、彼の意識の内部を見つめている。『或いはそうかも知れない。あれかも知れない。京都に何かあつたのかも知れない。』と彼は、彼の心の中に微かな光りのようにひらめいて来る疑問を追ひながら考えた。

『しかし、はたしてそんなことがありうるだろうか。どうして彼女に京都のことなど解る筈があるう。』彼の頭の中をちらと厭な想いが走る。『と言つても京都の連中の誰かが、何かの都合で、彼女にどこかで会うか何かして、彼女を連絡に使うということはありえないことではない。……併しもしそうだとすると、陽子がそれを伝えるのに、このような舞踊の会をえらぶなどということは……』彼は彼の心の中をかすめ通る或る不安を伴つた予感を追ひ払つた。彼は何かとりとめもなく書物の頁を繰るかのように彼の心に次々と流れて行く漠とした心の動きを追うて行つた。とすると、是非お伝えしたいという彼女の言葉は或いは彼女の造り出した口実にすぎないのだろうか。何のために？ 二人の關係

をもとにもどすために？ (別れてから今日まで憎み合つたままほとんど手紙のやりとりもなくすごしてきた) 二人の奇妙な關係をもう一度柔かく解きほぐし、再び互に近より合おうというのだろうか。いやそんなことは考えられないことだ。彼女のあの冷い心にそんな考えがほんの一筋でも浮ぶなどいうことはありえない。それに、あの、出泉の野郎、……彼はちらと、陽子の兄の出泉を頭にうかべた。彼の心は既に冷え、暗く、生気を失い、しぼんでいた。このまま会わずに帰ろうと彼は考えていた。併し彼は別に立ち上ろうともせず相変らず腰を下したまま自分の次第に重くなつて行く心の中を見つめていた。

右手の指から煙草の煙が真直に上り、ゆらゆらゆれて或る高み迄来るとくずれて煙つた明りの中へ漂い散つて行つた。正行は見るともなくその煙草の煙の行方を見上げていた。紫がかつた薄白い一筋の煙がとめどもなく彼の眼の前を上つて行つた。一筋の淡い切れ目のない煙が彼の心の中を上つて行くかようであつた。彼はみつめるともなくその煙がくずれて形を失う辺りをじつと見つめていた。……とその煙の中に何か彼の眼を見返しているものがあるのを彼は感じる。……彼を見つめているものがあるのを彼は感じる。ああと彼は言つた。立上る煙の中から一人の女の顔が浮んできたのである。『仕方ないのだ、仕方ないのだ』と彼はその煙の中に見える女の顔に向つて言つた。『お前を放置

して俺はここにきているけど、しかし仕方ないのだ。』

「正行さん、やはりここにいらしたのね。」明るい声が斜左の方にして、矢花正行が反射的にその方に眼を向けると、純白のびつたり身についたドレスを電燈の光にひらめかすように揺りながら、横の大理石の太い丸柱と立つている人の間を縫うて、如何にもひとに会えてうれしいという明らさまの微笑を顔一ぱいに浮べて大道陽子のしつかりした真白のハイヒールの足どりが近づいて来た。

「今日は切符をお送りしといったものの、来て頂けるかどうかと心配していたんですの。」彼女は彼の椅子から二三歩のところになると白いハイヒールをびつたりくつつける程に足をそろえて立ち止り、適度の運動によつて快く引きしまつた筋肉の弾みを含んでいる、匂やかな裸の腕につづく白のレース編の手袋をはめた右手を強く緊つた形のいい胸の高まりの辺りに軽く置き、少し上体をかがめるようにしながら、周囲の人々の存在などは無視していいというような態度をあらわに見せた、何か待ちももうけている期待を含んだ眼をじつと彼の眼の上に注いで、低いしかしよくとおる声で言つた。

「来て頂けたにしても、ひよつとすると黙つてお帰りになつてしまふんではないかと、氣をもうんでいたんですのよ。」

周囲の人々が一斉に二人の方に振り向き皆の視線が注がれているのを感じると、正行は半ば

陽子との会合を心の何処かで望んでいたものの、こうした場所でもこのような形で会うとは全然予想していず、その上先刻の陽子の踊りを見ながら味つた自分の敗北感が胸の中にあるので、彼女の真白のドレスの襷の多い裾が近づいてきて一揺れゆれてびつたり彼の眼の前に止つたとき、彼は何か自分の力で支えることの出来ぬような大きなエネルギーに溢れた生き物がのしかかってくるような圧迫におしつけられるのを感じた。彼は彼女に一言も言葉をかえすことも出来ず全くなすことを知らないもののようにじつと彼女の顔に眼を注いでいた。と彼女の眼は彼の顔の上にはんの瞬間現れ出た苦しい表情を敏感によりみ取つた。彼女の眼が彼の眼をじつと見据えた。そして彼女の顔の上にも、彼のその表情に反応する硬はつた筋肉の動きがちらと動いたようであつた。そして二人は、以前は互に恋人同志でありそれが余り面白くない別れ方をしていまはむしろ逆に敵対に近い感情を抱き合つて来たものが落ち合つたとき、どうしてもすごさなければならぬ最初の氣まずい一瞬が、二人の心の中をしめつけるようにして通り過ぎるのを感じていた。が次の瞬間彼女はそのような厭な心の動きをさつと振りすてるようにして、全くそれに氣づかなかつたもののように、幾らか媚めきの漂つている眼を彼の方に向けながら言葉をついだ。

「ほんとに心配してたんですよ。受付へも二度ほど行つてみたんですけど、まだお出になつ

てないという返事でしよう、どうしたんだらう、またあたしの御手紙の書き方がいけなかつたんじゃないかと思つたりして、氣をもんだんですの。」彼女は手紙の書き方のことを言いながら、軽い含み笑いを口の辺りにつけて、ふつと小さい笑いをもらした。「あたし以前随分それで正行さんを怒らせてしまつたんですね。」彼女は彼の顔の真近に彼女の微笑を浮べた顔を近づけ口早に、声を落して言つた。併し彼女は声を低めたとはいふものの、その態度はまるで辺りに人なきもののようにであつた。というよりも、むしろ、自分達二人は明らかに特別に親しい間柄であると、わざと辺りの人々に示そうとしているような様子であつた。

矢花正行は辺りの人々の注目の視線を感じた。殊に彼の両側に坐つている二人の男の、好奇心とばつの悪さが同時に浮んでゐるに違いない心の状態が彼にはつきり感じ取られた。……彼の眼のすぐ前には陽子の厚目に化粧をした顔が少し右に傾いて輝いていた。滑らかな半ばむき出しにされた円い肩が冷い光を含んで光つている。そして光沢を湛えた眼が彼の眼を覗き込んでいた。彼には一年間の互の奇妙な關係を無視しそこを飛び越えるようにして振舞う彼女の態度に應ずる心の準備がなかつた。先程廊下を往き来しながら、彼女に出会つた場合出来るだけ冷静な態度を保つてどう言葉を切り出すべきかを繰返し考へていたにもかかわらず、いまはそんな言葉は彼の頭の何処をさがしても見当らなかつ

た。彼は何か言わなければと思つたがその言葉が出て来なかつた。

「でもよかつたわ、お会いできて。ひよつとすると、此処にいらつしやるんじやあないかと思つて、きてみたんですの。」大道陽子は、面映げに彼女を見上げる彼の視線を感じ取ると勝誇つたように近づけた顔を後に引きながら言つた。が急に言葉を切つて「あら、あたし、まだ御挨拶もしてなかつたのね、ほんとに、あわてものね……。その後、お元氣でいらして？ お母様も、ずつとお店の方に？ お変りございません？ あたしお母様にもほんとうに御無沙汰してしまつて。」と言ひながら、再び大きな微笑の表情を顔に拡げた。

矢花正行は彼女の挨拶をきくようやく苦しげに微笑を浮かべながら立上つて言つた。

「ええ、ずつと元氣です、まだ内地に残つてぐずぐずしています。」彼は余りにも二人の間が近づき過ぎているのに重苦しさを感じて身を横に引いた。そしてようやく落着きを取返すと言葉を続けた。「御手紙有難う。僕の方こそ、すつかり御無沙汰して、……以前一度、手紙を書くかと考へたりしたんですけど、どうも、書けなくて。」

「どうして？ どうしてですか。」陽子はぐさま彼のその言葉を引取つて、再び彼の方に少しづつ身を寄せながら言つた。「きつと、まだあたしとのかを色々むずかしく考へて、勝手に氣を使つてらつしやるのね。」

「そういうわけでもないですが。」

「そういうわけでもないって、ではどう言うわけなの？」

彼女は、いたずらつばい微笑を浮かべながら言つた。がその微笑のどこかにはすき間があつてそこから何か努力感のようなものがうかがわれた。彼女の眼の前には彼女の微笑に応じようとしない彼の硬ばつた顔があつた。そしてそれが彼女の微笑をさえぎつていた。彼女が如何にしなければ彼の心が何か堅い楯たてのようなものを前に構えて彼女の侵入を防ごうとしているのをはつきり彼女は感じ取つていながら、それに気づいていることを彼に知らずまいとして彼女が振舞つてゐることは明かであつた。そして彼はそれを見抜いた。

「ここじゃあ、お話も出来ないわね……。」彼女は沈黙を抜け出しながら言つた。「どうもそうぞうしくつて。どこか御存じない？ 二人でお話してきるようなところ？」

「さあ。」

「外へ出てみませんか？ 涼しくつて話しくないかしら？」彼女は人々が出たりはいつたりしている斜右のバルコンの入口の方を向きながら言つた。

「さあ、あそこは狭いから、それにいつばいじやあないですか？」

「仕方ないのね、あたしとこも、いろんな人でごたつてますしね、……でもお会いできてあたしほんとに安心しましたわ、是非お伝えし

てあげなくちゃあいけないこともあつて、どうしてもお会いしたいと思つてたんですの。」彼女は、是非お伝えしなければならぬことという言葉に力を入れて言つた。

「ええ。」と彼は彼女の放つ柔かい視線をはじめて真正面から受けながら言つた。「やはりそうなのだ、やはり京都なのだ。」と彼は思つた。彼の心の中を、何か恐怖に似た不安が走り去つた。

三

横の長椅子に坐つていた人々が立上つて、バルコンの入口の方へ歩いて行つた。

「あら、空けて下すつたんですわ、ほんとに相すみません。」陽子は立上つた男の一人に軽く会釈をしながら言つた。しかし、その顔の中には別に感謝の色は表れてはいなかつた。

「お掛けにならないこと？」彼女が眼で彼を誘いながら言つた。そして、前の長椅子に半ば尻を載せるようにして腰掛け、ハイヒールをびつたりくつつけるようにして両足を置き、右手ですばやくドレスの裾の襞を正した。それからまだぐずぐずしている彼の方を見上げると、「はやくお掛けになつたら」というように眼で合図した。

矢花正行は彼女がそうして姿勢を正している間、じつと彼女に注視の眼を向けていた。彼女が少し前かがみになつて身を揺る毎に、彼女の腰や胸の上の真白いふくらみが、輝くように揺

れて、彼の眼の前に鮮かなまぶしい色を拡げた。彎曲した右の脇腹のところに、柔かい肉の感触が浮き出ている。裾から三分の一ほどのところで強いぐびれを入れて後にはね上げている髪の毛の横から形のいい冷い耳が覗いていて、その下の頸の肌に幾分上気した血潮のあとがほの赤く透いている。彼の眼はじつとその肌の上にとまつた。その肌の表から、彼女の体のうちに動く何か不思議な力もれ出てくる。彼の眼の中を先程舞台でみた彼女のほとんど裸に近い体がひらめくように動くと、彼の体の中でその裸に近い彼女の体に向つて無理にかけ寄ろうとする烈しい慾望が動き、彼の全身をつらぬくのを彼は感じた。

「お掛けにならない？」陽子は巧に彼の視線をはずしてにつこり笑いながら言つた。がその声には何処か調子外れの響があつた。

「今日はほんとにつかれてしまつて、あたし何だか落着かないようね。」彼が彼女との間を少しあけるようにして腰掛けると彼女は無造作に膝頭を彼の体近く寄せ体を斜に彼の方に向けながら言つた。「今日のような新しい演し物はあたしにはまだせい一杯なのよ。」

「そう、つかれたでしょう、實際烈しい運動だから。」彼の方に身を寄せてくる彼女の態度に氣圧されるように思いながら彼は丁寧な言葉使いをして言つた。

「ええ、とても。」

「……」

「それに、今日はいつもと心構えがちがうでしょう。あとに、正行さんのしんらつな御批評がひかえてるんだと思うと。」彼女は、彼の顔を覗き込むようにして彼に笑い掛けたが、彼の方で彼女のその話題にのつてこないのに気づくと、すばやく話を別のところにもつて行きながら「おぼさま、お元気で結構ですわね……、お祖母様もお元気？」彼女は、膝の上で両手の指を組んだり離したりしながら言つた。

「ええ、有難う。祖母は此の間から一寸寝込んでいますが、もういいのです、ただ暑さにまけたという程度ですから……。お袋の方は相変らずです。お金儲けに忙がしくて……。」矢花正行は、彼女の方に向き直りながら、言つた。しかし、彼が金儲けという言葉を使つたとき、そこにはこうした言葉をわざと陽子の前で使つて、彼女にそれをつきつけようとするような調子があつた。

「お母様も、大変ですわね。……あたし、すっかり御無沙汰してしまつて、お訪ねもしないで何か考えていらつしやるでしようね……。」彼女は彼のその言葉を巧みにはずしながら言つた。

「お祖母様、ほんとにおよろしいんですの？でもお氣をつけにならないと……。お兄様やはり以前のところにお勤めですか？」

「ええ、もとのところに行つています。新しいところに変ろうかどうか前から言つてるんですけどやはり、もとのところに落着くような模様です。」

「ええ……何時、召集が来るかも知れないし、いま変るのは損だつて、この前、道で一寸お会いしたときもそうおつしやつていらしたわ。……ほんとにお久しぶりでお会いしましたのよ。お会いしたこと正行さんにお話しになつて？」

「さあ、何も言わなかつたけど……」

「ふふ……」彼女はその時のことを思い起すと急におかしさがこみ上げてきて仕方がないがそれを堪えているという風に唇の端をかみしめた。そして彼女の方に乗り出すように顔を寄せ、「ほんとに正行さんのお兄さんは変つたお考えをもつてらつしやるのね……ふふ……この間も梅田新道のところでお会いしたんだけど……どうして此の頃遊びに来ないんです、又喧嘩が始まつたんですねつておつしやるの、それであたしがええ、また始まつてますのと答えると、喧嘩もたまにはいいけれど、あなた方のようにその度度では、ねうちがありませんね……もうええ加減にやめんとあかんあかんですつて……であたしも、おさとしほんとに心にしますわ、そのうち全面和平を申込みますわ、その節はよろしくつて、申上げておきましたの？」彼女は彼の眼を眼で押えるようにしながら続けた。

「そのとき、おつしやるのが面白いのよ、どういうんでしようね、赤紙がまだ来ないんですけどね、やはり『憎まれ子世にはばかる。』でつしやるな、だつて。それから急にしんみりとして、僕ほど悪いことをしてきた人間はないでしょうにねつて。もうあらゆることはしつくし

ましたよ、まだ完全に経験していないのはまあ自殺位のものですね、だつて。『完全に経験していないのは』なんて、おつしやるんですものね……ふふ……」彼女は再び唇を噛んだ。そしてそのように唇の右端を少しばかり口の中にくわえこんで唇の端を乱しているときの自分の顔の魅力をはつきり自覚していて、その顔を、矢花正行の眼の前に展げる風にもつて行つた。

『そのうち全面和平を申込みますわ……何を言うのだ。……全面和平？ 何処で戦争分析をききかじつてきたか知れないが、いま頃、何を言つてるのだ。』……と、彼の頭の中を、何か熱い、暗い影が走る。そして彼の内に過去の一つの情景が甦つてきた。……この白い胸の上には、以前彼の唇の吸引がつけたほの赤い血潮の跡がにじみついたことがある。このよく発達した厚い広い胸、その胸の上部の白い皮膚をとおして彼の唇のつけた赤い毛細管の花びらが、この白い薔薇の形の胸飾りの丁度上のあの辺りに拵がり、長い間消えずにあつたではないか。その胸の上の血潮の淡いばらの花の上に唇をあてて、彼は優しい呼吸をふきかけた……そしてその熱い彼の息の下で曇ることなく更に赤味を加えたその肉の花びら、そして、あの顎は彼の掌の中にあつたのだ……。『何を言うのだ、何を言うのだ。』と彼の心は繰返し叫んでいた。『おさとしほんとに心にしますわだつて。どうして、今頃になつてそんなことが言えるというのだ。』彼の心は彼女の言葉に抗おうとした。併し、彼